

岡崎市議会議長 様

支出番号	
------	--

会派名 公明党
代表者名 畑尻 宣長

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政 務 活 動 報 告 書

令和 7年 5月 7日提出

活動年月日	令和 7年 4月 18日（金）	
氏名	野島さつき 山村 栄	
用務先 及び 内 容	1 4月18日	用務先 愛知県 長久手市
		内 容 発達性ディスレクシア研修について
	2 月 日	用務先
		内 容
	3 月 日	用務先
		内 容
	4 月 日	用務先
		内 容
備 考		

政務活動調査報告書

視察日	令和7年4月18日（金）
視察内容	長久手市：発達性ディスレクシア研修について
視察者名	野島さつき 山村 栄
市の概要	面積：21.55 km ² 人口：61,113 人 人口密度：2,835.87 人/km ² 世帯数：25,626 世帯 経常収支比率：94.7 % 公債費比率：1.7 %

<発達性ディスレクシアとは>

知的発達に遅れがないにもかかわらず、文字を読む・書くことに特有の困難を示す障害である。神経発達の違いによって生じるものであり、幼少期から現れ、生涯にわたって続く特性である。

<長久手市が取り組んだ経緯>

長久手市では、読み書きに困難を抱える子供たちの支援必要性が議論され、議員が「Tsukuba モデル」の導入を提案した。このモデルは、発達性ディスレクシアの早期発見と支援を目的としたプログラムで、筑波大学の宇野彰教授（現・LD・Dyslexia センター理事長）によって考案された。市長と教育長もこの提案に賛同し、導入が決定された。

2024 年度から、長久手市では小中学校の一部の教員を対象に、発達性ディスレクシアに関する専門的な研修を実施。

また小学校1年生と中学校1年生を対象に、読み書きに関するスクリーニング検査を行い早期対応を図っている。これにより、発達性ディスレクシアの児童生徒に対する適切な支援が可能となり、学習環境の改善につながっている。



<目的>

- ・専門的な教員の育成
- ・発達性ディスレクシアの早期発見、早期対応
- ・専門的な教員が関わることにより、児童に適した練習方法で読み書きの習得へとつなげる → 合理的な配慮を必要とする児童を減らす
- ・検査の実施により、客観的判断を行い、根拠に基づいた支援を行う
- ・発達性ディスレクシアについて教員の理解を深め、指導力を高める
- ・市内全体での体制づくりを構築し、特別支援教育を推進する

<研修計画> 令和6年度～令和8年度

- ・年間4回 研修実施（市内小中学校より各1名程度参加）
- ・検査やトレーニング法の理解と取得

<研修の詳細> 令和6年度～令和8年度

- ・演習① 集団検査の実施
- ・演習② 個別検査の実施
- ・演習③ 聴覚トレーニング（2～3種類）の実施

<成果>

- ・専門的な教員が育つ
- ・児童に適した練習方法で読み書きの習得ができる
- ・客観的判断を行い、根拠に基づいた支援や配慮ができる

<所 感>・・・野島さつき

長久手市では、生まれつき読み書きに困難がある「発達性ディスレクシア」の子どもを早期に発見し、適切な支援や指導ができる教員を養成する研修が行われています。発達性ディスレクシアに詳しい元筑波大学教授で、NPO 法人 LD・ディスレクシアセンターの宇野彰理事長が研修を担っています。

宇野先生の調査では、生まれつき読み書きが困難な子どもは児童全体の 7～8%を占めていますが、会話も流暢で、理解力もあり、知的には問題がないため気付かれず見逃されるケースもあります。つくば市では、就学前健診、入学後の 6 月下旬から 7 月、夏休み明けの 9 月の 3 回テストを行い、いずれも平均点を大幅に下回った児童に、保護者の許可を得て詳細な検査を実施し、例えば音声を記憶するのが得意であれば、音で 50 音を覚えられるような指導をしていきます。モデル校では 2016 年度からの 5 年間で、専門的な教員から指導を受けた児童 3 人全員が、ほぼ完璧にひらがなを習得できたそうです。ひらがなの習得は、その後のカタカナ、漢字の習得に影響するため、非常に重要とのこと。2022 年度からは、市内全校で行われています。

長久手市でも、つくば市の方法を参考に、2024 年度から 3 年間で専門的な教員の育成と、発達性ディスレクシアの早期発見、早期対応に取り組んでいくそうです。大沢教育長は、自身が中学の教諭として英語の授業を担当していた際、書くことが苦手な生徒が自信を無くしており、聞いたり話したりする授業に変えると元気を取り戻したという経験をお持ちで、「読み書きの困難さへの知識があれば、より適切な支援ができた。教員がスキルを身に付けることで、誰一人取り残さない教育につながる」との思いから導入されたとのこと。

発達性ディスレクシアは、発達障害のなかでもっとも高い出現頻度であるにも関わらず、親も教員も気づきにくい「目に見えない障がい」ともいわれています。一度にたくさん読んだり書いたりできないため、テストの時間内で本来持っている実力を発揮できないことも多く、努力をしても結果が出せない苦しさの中で、自分は能力が低いと悩んでしまいます。また、周りの教員や保護者も、やる気がないから、練習が足りないからと思いがちで、更なる努力を要求してしまい、そのことで不登校やうつ傾向に陥るなど、二次障がいに移行させてしまうことも少なくないといわれています。専門的な教員を養成することで、子どもの特性に合った教え方ができ、習得につながられます。本市においても、子どものつらさを軽減できるよう、早期に発見し、適切な支援や指導ができる教員を養成していただけるよう、要望してまいります。

<所 感>・・・山村 栄

長久手市へ発達性ディスレクシアについて視察してまいりました。発達性ディスレクシアは、文字の読み書きのみ困難さを持つ先天性の学習障害として知られています。会話や知的能力に問題がないため、障がい自体は周りから気づかれにくく、学校生活では、読み書きの難しさから授業についていくことが困難で、結果的に学習意欲の低下や自信の喪失から不登校に陥るなど、二次的な不適応が生じやすい障がいとされています。また障がい種の中でも出現頻度が高いと言われ、小学生の約7%から8%が発達性ディスレクシアであるとの報告もあります。1クラスに2, 3人の子どものこの障がいがあるとされています。

筑波大学元教授の宇野彰先生は、発達性ディスレクシアの研究と支援において日本を代表する専門家の一人です。医学博士で、言語聴覚士としても活動されており、LD・Dyslexiaセンターの理事長を務めてみえ、教員向けに発達性ディスレクシアの概念、検査法、指導法などの研修を実施されています。

長久手市では、発達性ディスレクシアの支援方法として「Tsukuba モデル」を導入しました。「Tsukuba モデル」は、茨城県つくば市が発達性ディスレクシアを持つ子どもたちへの支援を目的として開発した教育支援モデルです。このモデルは、早期発見と専門的な支援を通じてすべての子どもが基本的な読み書き能力を習得できるようにすることを目指します。

つくば市では、「Tsukuba モデル」を導入した結果、発達性ディスレクシアのリスクがある子どもたちの約90%が、他の子どもたちと同じレベルでひらがなの読み書きが習得できるようになったと報告されています。

長久手市は、2024年度より市内の小中学校の一部の教員を対象に発達性ディスレクシアに関する専門的な研修を実施しています。これにより、教員が早期に児童生徒の困難を発見し、適切な支援を行える体制を整えています。また小学校1年生と中学校1年生を対象に、読み書きに対するスクリーニング検査を行い、早期対応を図っており、今後3年間で専門教員を27名程度養成される予定になっています。

発達性ディスレクシアは何よりも早期発見・早期対応が重要であります。遅くなればなるほど、本人の自尊感情が下がり、学習への意欲がなくなってしまうです。本市においても早期に発見し、適切な支援ができるような取り組みを導入して頂けるように要望してまいります。